

州〔船を瓜州に泊す〕詩の転句—「春風又緑江南岸〔春風 又た江南の岸を緑にす〕—については、草稿段階では「春風又到江南岸〔春風 又た江南の岸に到る〕」としていた。しかし「到」字が気に入らず、「過」字に改めた。しかしそれも気に入らず、「入」字に改め、さらには「満」字に改めるなど、推敲に推敲を重ねること十数字にして、ようやく「緑」字に決めたと言う（南宋・洪邁『容齋続筆』第八）。このように句作りに相当のこだわりを見せた王安石が「緑成白雪桑重緑、割尽黄雲稻正青」の二句については、異なる二首の詩のなかで繰り返し用いているところから見て、彼自身この二句の出来映えについては納得していたものと思われる。

拆哪儿？—最新中国語おもしろ探訪

現代中国学部
薛 鳴

教学の一環として、わが学部では2年生全員を中国南開大学に留学させ、中国語と中国文化を勉強させる現地プログラム—「現プロ」を実施している。その引率で今年度の春学期を天津で過ごした。

事情あって二週間遅れの現地入りは、ちょうど世界を震撼させた「3・11」大震災発生の直後だった。不安から母国へ、外国へと脱出しようとする人々で賑わう空港の出発ロビー。期せずにして、地震と原発の影響下にある日本を離れることになる自分がいるとは、なんとも不思議に思えた。

中国に来ると、まず耳にしたのは“抢盐”——塩の買いだめである。日本の海が放射能で汚染され、海水からできる塩化ナトリウムの結晶である塩も「核」に汚染されるとなると、日本海から来

る潮が塩になるからと、一夜にして、塩の値段が何倍も跳ね上がり、人々は塩の買いだめに奔走する。携帯のチェーンメールに“大核民族、盐荒子孙”というのが広く流伝し、ユーモアに皮肉も込められ、人々の口から口へと伝えられるに至った。いうまでもなく、“大和民族、炎黄子孙”をもじったものである。“核”と“和”は同じ“hé”と発音し、大和民族が一瞬にして「核」を帯びる民族になり、“盐荒”と“炎黄”は、声調がやや違うが同じ“yan huang”という発音から、“炎帝”と“黄帝”の子孫である“炎黄子孙”と誇りを持って自称する中華民族の子孫が塩不足にオロオロしていることになる。もちろん、事はそれほど短絡的なものでないことが判られ、その騒ぎもほどなく収まった。その後の原発への反省に、“核去何从”（“何去何从”をもじったもの。“核”と“何”は共に“hé”と発音する）といったような文言が新聞の紙面に躍り、我々は一体いずれを去り、いずれに従うか、身の処し方に疑問を投げ付けられる。

このような同音異義語を利用するものは“谐音”と言って、広く中国語のレトリックな表現に用いられている。古くから“歇后语”に使われるものに、“孔夫子搬家——净输（书）”のようなものがある。「負けてばかりいる」と言うために、「孔子の引っ越し——本ばかり」を持ちだして、“书”（shū）と“输”（shū）の“谐音”を利用して、ワンクッションを置いて面白おかしく表現する効果をもたらす。ほかに“外甥点灯笼——照旧（舅）”（依然として変わらない様を表す。“旧”と“舅”は発音が同じ“jiù”である）のようなものよく知られている。

一方、携帯電話やインターネットの普及によって、情報伝達のツールも多様化しているなか、中国では携帯電子メール（“短信”）に数多くのチェーンメールが回っている。数々の風刺やユーモアが、その“短信”に乗って人から人へと伝わっている。冒頭の例もそうだが、新年の挨拶に次のようなチェーンメールが回る。

祝你在新的年里，“钱”程似锦，“富”如东海，“瘦”比南山，“性”福美满，“薪”春快乐！

本来の“前程似锦，福如东海，寿比南山，幸福美满，新春快乐”が、一文字をすり替えただけで、現代人の欲望を巧みに表している。

“钱” = “前” qián; “富” fù = “福” fú; “瘦” =

“寿” shòu ; “性” = “幸” xìng ; “薪” (給料の意) = “新” xīn

このように、四文字成語を“偷梁換柱”(文字をすり替える)して広告に使われる例も見る。例えば、アイロンコピーのキャッチフレーズに“百衣百順”というのがある。それは“百依百順”(全面的服従の意)の“依”(yī)が同じ発音の“衣”にとって代われ、服も言う(思う)がままになるアイロンであると謳う。また、浴室の湯沸かし器のコピーに“随心所欲”とあって、“随心所欲”(思うがままに)と掛ける(浴=欲 yù)。百貨店のファッション売り場では秋の新作を“早秋狂潮, 试不可挡”——「秋を先取り、試着が止まらない」というキャッチコピーで客の心をくすぐる。“试不可挡”は“势不可挡”に掛けて(“试”=“势” shì)「勢いが止まるところを知らない」と掛かっている。また、マイホームの売り出し広告に“贷动房产, 直抵梦想”——「ローンを組んで夢(マイホーム)へまっしぐら」というのがあるが、“贷动”(dàidòng)は“带动”(dàidòng「リードする」)と掛かり、“直抵”(zhí dǐ)は“值得”(zhí de「~する価値がある」)と掛かっている。

同音異義語を利用したキャッチフレーズはインパクトがあって宣伝効果を高めるが、それはしかし、中国人の教養(学力)をはかる“白字”と紙一重である。“白字”とは“错别字”(誤字)のことであり、漢字しかない中国語で文章を書くにあたって、字が思い出せなくても、日本語のように仮名に代わってピンインで書くわけにはいかない。もっとも日本語でも漢字があるのに仮名で書くのは好ましいことではないが、中国語の場合は、同じ発音の別の字で代用する、または間違いとも知らずに同音異字を書いてしまうと、直ちに“白字”と言われ、学力が足りないと思なされてしまう。一方、パソコンの普及で文字の電子化に伴い、文字は「書く」ものから、「打つ」ものになってしまっ、人々は否応なしに、数多くの同音語や誤変換との格闘に曝されることになる。幸か不幸か誤変換が定着してしまう用法(と言っても決して規範的ではない)も多く見られるようになった。ことにミニブログ(“微博”)となると、言葉のしゃれた使い方が枚挙に暇がない。“什么”(shénme)を“神马”(shénmǎ)と書き“神马都是浮云”がブログ上の合い言葉になっているようだ。“什么

都是浮云”「何もかも空に浮かぶ雲のようだ」。如何に解釈するかは読む人に任せる。人生の儚さとも、手に届かないもどかしさとも読める。さあ、あなたはどうか解釈するか。

次の例もある。

人生如一桌酒席, 上面摆满了杯具。人生はまるで宴会のようだ。テーブルには盃がいっぱい置いてある。

何を意味しているのか、文字通りの解釈では分からないが、“杯具”(bēijù)と悲劇(bēijù 悲劇)が掛かっているとすれば、なるほどと思わせる一句である。

誓言只是一时的失言。(誓いの言葉はただ一時的な失言にすぎない)

“誓”(shì)と“失”(shī)、似ている発音を利用したシャレである。公約は失言とも取れかねない一方、問題発言は「失言だった」と言い逃れをしようとする一部政治家の言動を思うと、よく言い当てているのではないか。

そして、極め付きは表題の“拆哪儿”である。北京は“后海”界隈にある“煙袋斜街”。清末頃、主に煙管などの喫煙道具や掛け軸の表装、玉の装飾品などを扱う、200メートル余の伝統的な北京の風情が漂う“胡同”(横丁)である。2007年に復興工事の後、文化商業街と定められた。筆者がそこのある店で見たマグカップに書かれた文字である。オバマを毛沢東に見立てた顔写真がプリントされたTシャツや、“为人民服务”(人民のために奉仕する)を“为人民币服务”(人民幣のために奉仕する)ともじった文言など、覚えきれないほど数多くの風刺の言葉が書かれた小物を扱っている。アイデアを盗まれるのを恐れるためか、店内撮影禁止で一生懸命覚えようとするなか、記憶装置をわざわざ稼働させなくても音とともに脳裏に焼き付いて離れないのが、この三文字である。中国の街を歩くと、至る所で工事が行われていることに気が付くが、北京では、伝統的な胡同も“拆”(取り壊す)の運命を免れないほど、古い建物に“拆”という文字が書かれている。此処も彼処も“拆”。では、次は何処を“拆”するか。それを中国語で“拆哪儿”と言う。ここまでは、まだ表題の謎掛けは終わらない。“拆哪儿”——中国語で発音すると“chāinǎr”。China をアメリカ英語風に巻き舌で発音するのと同じなのだ。